い)。

【解釋】眞個に哲學の意義を創定した希臘の大聖ソークラテースは、明と速とを其の神德とするアポロー神が下せる γνῶθι σεαυτόν「汝自を知れ」の關門を通過することが出來ないので、自ら愚者なりと知つて、有言を弄したが爲めに、遂に民衆の爲めに殺さるゝに到つた。余も亦以上無量劫事を有言を以て說き了つた積りである。隨處作主の工夫は、よく細嚼して、或者を自己に實現することであることをも、既に十分に論じて來た積りである。從て余は當に此の三關に答ふべきである、曰く——

第一關。プラトーン曰く觀念の居處は觀念界なり。我が性よく我が性を覩破す。我の本性は自由なる藝術的創造なり。

第二關。子曰、未ㇾ知ㇾ生、焉ㇾ知ㇾ死。何ぞ眼光の落つる時を待たん。我只だ我が生をよくせんのみ。努力精進。

第三關。楠正成曰く、七生ニ人間ニ滅ニ國賊ヲ。吾は日本人なり、日本人の衷に向て去らん。君が代は千代に八千代にさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで。

【參考】此れを所謂禪的の氣分生活として考へる時の參考として、無盡居士の三

頌を擧げて置く、而て今一々講義せず。

第一關。陰森夏木杜鵑鳴　日破ニ浮雲ヲ一宇宙清　莫ㇾ對ニ曹參ヲ一問ニ曾哲ヲ一　從來孝子諱ニ爺ノ名ヲ

第二關。人間ノ鬼子符來取　天上ノ花冠色正萎　好箇轉身ノ時節子　莫ㇾ敎ニ閻老ヲ一等閑ニ知ヲ

第三關。鼓合東村李大妻ノヲ　西風曠野ニ淚沾ス衣ヲ　碧蘆紅蓼江南ノ岸　却作ニ張三ト一坐ス釣磯ニ（鼓合は鼓盆か）

四八　乾峯一路

乾峯和尙、因ニ僧問ヲ一、十方薄伽梵、一路涅槃門、未ㇾ審路頭在ニ甚麽ノ處ニ一峯拈ニ起ス拄杖ヲ一劃ス一劃ス云、在ニ者裏ニ一、後僧請ニ益ス雲門ニ一、門拈ニ起シテ扇子ヲ一云、扇子跿跳シテ上ニ三十三天ニ一、築ニ著ス帝釋ノ鼻孔ニ一、東海ノ鯉魚、打ツコト一棒スレバ雨似ニ盆ヲ傾ケルニ一、

無門曰、一人向深深海底行、簸土揚塵、一人於高高山頂立、白浪滔天、把定放行、各出一隻手、扶竪宗乘、大似兩箇馳手相撞著、世上應無直底人、正眼覷來、二大老惣未識路頭在、

頌曰

未擧步時先已到　未動舌時先說了
直饒著著在機先　更須知有向上竅

【說明】乾峯和尙は洞山大師に嗣ける人で、雲門久しく此の乾峯の所にありて、よく其の家風を知れり、因て此の問僧又雲門に請益したのである。而て此則は、乾峯雲門兩人の自由なる働きぶりを表はしたのである。然し我等の解釋からするならば、最早四七で終りである、此の則の如きは、所謂禪的には興味があるであらうが、我等には餘り興味がない、只だ禪宗坊主の變てこな働き振りを示すのみである。

【公案】乾峯和尙の所へ或る僧が來て、『楞嚴敎』卷五にある文句を持ち出し、十方薄伽梵(佛或は如來の原語)一路涅槃門、――といふは十方卽ち佛、向上の涅槃門は一本路であるといふ事――といふ、其の意味がよくわからぬ、涅槃の一路は何れにありやと問うた。すると乾峯は拄杖を取つて一の字を畫き、此の內、にあると答へた(昔し希臘の何んとか云ふ哲學者は、圓周を劃いて此の裏にありと答へた事もある)。此の僧が後に雲門の所へ行き、此の話をして、乾峯の意味する所如何を說明せられん事を請うた、すると雲門は扇子を取り出して云ふ、扇子がはね上つて須彌頂上の三十三天迄上つて、其處の主人の帝釋天の鼻の孔へぶつかつた(築著)、東海の鯉が(龍の天上ではなく)一はねはねたら、大雨盆をくつがへすが如しぢやと答へた。

【無門曰】一人は深い深い海底へ行き、其の海底で土を簸、塵を揚げる大騷動を演じ、他の一人は高い高い山の頂上に登つて、天に到らしむる程な、大波浪を起して居る。何んだ、たはけた不合理なことをやつて居る。然し此れが禪的の見方である事に注意すべし、卽ち――把定放行、よく各自の立派なる手腕を出して、宗乘を扶け起して居る。把定とは、ひつ捕へること、放行とは、つき放すことで、各自自由自在の手腕を奮うてゐて、恰も是れ二人の走手が互に撞著(ぶつかり合ひ)して居る樣である。

然し世の內を見渡すと、眞正の人は無い(直は眞の誤りならんと云ふ)。よく〳〵正眼に觀來れば、乾峯も雲門も、惣に(ひくるめて)未だ涅槃の一路に就いて、識らない所があると云ふべしである。

【頌】足で歩行してから行く樣では、まだ足らぬ、舌を動かして說明するようでは、未だ眞ではない、未だ足を擧げざるに既に到り、未だ舌を動かさゞるに、先づ說き了る働きでなくてはならぬ。此れは直接には乾峯及び雲門の用處の自由なるを表明したのであるが、一般にかゝる働きは如何なる所に存在するか。ともかく此の二老よく機先を制する働きを有し著々先手に出て行くが、假令斯くの如き働きがあつても、よく注意しないと危險である、更に他に向上の竅穴(のあるのを知らなくてはならぬ。—これは直接には、未だ路頭を識らざるありを指したのであるが、一般にはうつかりすると坑に陷つて、出處がなくなるといふ事を示したのである。

【參考】『碧巖錄』の「雲門拄杖化龍」を參考とするであらう。—

擧、雲門以二拄杖一示レ衆云、拄杖子化爲レ龍、吞二却乾坤一了也、山河大地、甚處得來、

圜悟評唱の一部に云ふ、

胷中若有二一物一、山河大地、縱然(縱音松)隆起の貌也、故に縱然は森然なり)現前、胷中若無一物一、外則了無二絲毫一、說二什麼理與智冥境與神會一、何故、一會一切會、一明一切明、長沙道、學道人不レ識レ眞、只爲從前認レ識神一、無量劫來生死本、癡人喚作二本來人一、忽若打二破陰界身心一、如身外無レ餘、猶未レ得二一半在一、說二什麼卽色明心、附レ物顯レ理、古人道、一塵纔起大地全收、且道、是那箇一塵若識得這一塵、便識得拄杖子、纔拈起拄杖子、便見縱橫妙用、恁麼說話、早是葛藤了也、何況化爲レ龍、云々

次に雪竇の頌と、其の仕方とを擧げると

拄杖子呑二乾坤一、徒說桃花浪奔、燒レ尾者不在二拏雲攫レ霧、曝レ腮者何必喪二膽亡一レ魂、拈了也、聞不聞、直須灑灑落落、休更紛紛紜紜、七十二捧且輕恕、一百五十難放レ君、——師驀拈二拄杖一下座、大衆一時走散。(禹門に三級の浪あり、三月に至る毎に桃花の浪漲る、魚よく此の水に逆うて浪を躍り過ぐるもの、化して龍となる、而て魚此の禹門を過ぐれば、自ら天火ありて其の尾を燒き、雲を拏ひ(ひこづらひ)霧を攫んで去る、といふ故事を用ひたるなり)

【解釋】四十八則も愈此れで結末であるが、さて如何にか之を解釋せん。前にも

言へるが如く、禪坊主は知的直觀の妙用と、感性的直觀との區別を沒却して居る。——勿論直觀としての妙用は、知的或は感性的といふ區別を爲すを得ざれども、——故に稍ともすれば、雲門の如くに直ちに拄杖子を拈起し、下座して大衆を追ひ廻すが如き、狂態を演ずるのである。十方是れ佛、大自然の一物一切、皆大組織の大切なる契機である、若し形式的に云ふならば、長安の大道四通八達上下四維、何れも皆涅槃に向ふ路ならざるはなしである。故に其の道は、自ら劃一劃の內にもある。而も一路涅槃門といふ所以のものは、人には人の特色がある、彼の路は我の路ではない、各其の本來の規定に從ふべきである。乾峯併に雲門、共に只其の形式的方面を指示するのみ、未だ其の內容を示さず、故に無門は、二大老總に未だ路頭を識らざるありと批評したのである。乾峯の用處は、劃一劃する吾人の働きの上に就て云ひ、雲門は、拄杖子化して龍となり、乾坤を呑了せりと云ふと等しく、扇子といふ一箇のものが、組織的存在としては、大切なる一大契機であり、其れ自らが組織體であることを示したものである。卽ち組織といふ上から云ふならば、ヘーゲルが概念に就て云へると同樣に、一切のもの皆必然的の契機としては、他の內にありてよく己れが

自性(全一性)を保持する所のものである。既に其の內にあつては、內外大小等の、時間や空間的關係は最早超越して居る、否な却て其の組織的の活動が、時間や空間や因果的關係を生ずるのである。故に時間や空間や因果による差別智から云ふならば、扇子は地上の一物である、慾界の最頂點たる帝釋天に達する氣遣ひはない、鯉が龍になる筈がない、深海の底で簸土揚塵したり、高山の頂で白浪滔天などは、途方途徹もない事であるが、組織の上から云ふならば、天は地によつて天、地は天によつて地、山は海によつて山、海は山によつて海である。深海の底に乾ける土塵あり、高山の頂に白浪があるわけである。卽ちの此の組織の上から云ふならば、既に我等は組織せられて居る、言語を發する迄に言語を領會するだけの精神は既にあり、未だ足を擧げざる先きに、已に既に到り了れる所があるのである、言語や行爲は、只だ其れを明かにするだけの機會(偶因)たるに過ぎぬ。

然し既に述べた如くに、禪宗は此の組織的大活用を、十分論理的に論述することが出來なかつた爲めに起されたる所の働きであるが故に、上述の如く知的直觀と感性的直觀の區別も出來ず又現實に與へられたる個々の物體と、論理的なる組織

との區別も出來ず、然も其の內に脈々貫通の處のあることだけを知つたのである
から、所謂禪的の働きとしては、感性的なる直接なる自然物を取つて來て、其れに否
定の論理的妙用を現はさんとしたのである。其處に把定放行といふ兩作用を
必要として來たのである。拄杖子が化して龍となり乾坤を呑了するの、扇子が帝
釋の鼻孔に築着するのといふ事は、皆な一面には抽象的知識を放行し、組織的妙用
を把定するの働きに外ならぬ。而も此の把定放行の働きたる、四四に說明した如
く、我等に於ける實現の働き、卽ち人が人格者として有する德の上の事である、徒に
棒で打つたり、掌で擲つことではない。正當に云ふと、我等人格者としての働きに
は、一切皆な此の把定放行の兩作用を具有して居らなくてはならぬ之を「人格の力」
と云ふ。然し時には嚇かすと吃逆が止まることがある、小兒は爲めに泣き止むこ
ともある、其の限りに於て、喝や棒や掌やも、亦必要であらうが、それも無法に、然も無
力なものが用ゐれば、一層吃逆が甚だしくなり、一層小兒を泣かすことになる、否な
それを止めさせた得た所が、反て害を起すこともある。世上未だ到らざるの士よ、
無法に斯るものを使用せざらんことを切望する。もう世の中の人は、六七百年前

の支那人の頭とは相違して居ることを忘れてはならぬ。無門亦故に云ふ、只だ徒
らに機先を制するだけが能ではない、向上の一路は更に他にある。故に我等は此
處では、只だ乾峯や雲門の何等の執着のない、自由の働きを藝術的に鑑賞して居る
べきである。—只に乾峯雲門のみに對して云ふにあらず、以上の四十八則何れも皆
な藝術的に鑑賞すべきもので、我等は我等の世界に於て、我等の如實の經驗の媒介
によつて、思惟根本の妙用である所の否定を働かせて、自己の世界を實現し創造す
べきである。」

從上佛祖垂示機緣據欵結案初無剩語揭翻腦蓋露出眼睛肯要
諸人直下承當不從佗覓若是通方上士纔聞擧著便知落處了無
門戶可入亦無階級可升掉臂度關不問關吏豈不見玄沙道無門
解脫之門無意道人之意又白雲道明明知道只是者箇爲甚麼透

不過恁麼說話、也是赤土搽牛嬭、若透得無門關、早是鈍置無門、若透不得無門關、亦乃辜負自己、所謂涅槃心易曉、差別智難明、明得差別智、家國自安寧、眥紹定改元、解制前五日、揚岐八世孫、無門比丘慧開謹識、

【字解】知落處とは、禪宗ではよく用ゐらるゝ語で、箭の落ち所、行く先、即ち意義を知ることである。玄沙は玄沙師備禪師。白雲とは白雲守端禪師。赤土搽牛嬭―牛嬭は牛乳、搽は塗る事、清潔なる赤土へ牛乳を塗りて穢すことである。眥は時の古字。解制とは夏期蟲類を害せぬ爲め、印度の風習に從ひ、外出を止める事、即ち安居と云ふ、其の安居の制の解かゝる事。揚岐八世孫とは無門は禪宗七派の內での揚岐派の八世の嗣といふ事である。其の法統は總說の終りを見るべし。

【通解】以上佛祖が機緣に從て、垂示教訓せられた四十八則を、それ〴〵に評唱し頌をつけて、順序に竝べて見た。此れ等の公案、始めより無駄語は一つもなく、皆な腦漿をしぼり出したもの、大切なる點を露出したものである。敢て讀者諸子に要

求する所のものは、直下に其れを承當すべし、言句に覓めたり、他處に尋ねたりしてはならぬ。若しよく達觀し得る、自由なる上々の人ならば、其如何なる公案たるを論せず、纔かに云々と云へば、便ち其が何の意義たるを知る事が出來るであらう。了悟るに別に門戶の入るべきものもなく、別にこれといふ上るべき階級があるのではない。直指人心、見性成佛、甚だ容易な事である、さうすれば臂を掉つて關を通過するに、何人も之を止むるものはない。玄沙和尙の道へることあるを見ずや。無門解脫の門、無意道人の意と。門のない解脫門＝入不二法門何等特別の意志のない道人の意。又白雲守端は云ふ、道は明々白々に知られて居る、然るに此の明々白々たる所の道を、何の爲めにか透り得ざるかと。勿論此の如く說くも、既に餘計な葛藤である、本來淸淨なる者を、不都合な言句で穢すことである。若し此の無門關を透り得るならば、既に早や無門を無用の長物たらしめるのであるし、若し無門關が透れない樣な事なれば、此れ又自己自身に叛した事である。所謂涅槃心は却て曉り易いが、差別智は明かにし難い。此の差別智を明にしたならば家も國も自ら安寧であるであらう。時に紹定元年安居の終る五日前、揚岐八世の法孫無門

比丘慧開謹で識す。

所謂涅槃心曉乃至家國自安寧――此れは既に序文を說明する時にも述べたが如くに、非常に大切なる點で、余が特に『此の『無門關』を解釋せんと試みた根本意旨、竝に解釋の方法も、亦全く玆にあつたのである。勿論正當には涅槃心を曉ることは、差別智を明かにすること(逆も亦然り)であるから、此の兩者に曉り易く、明め難しと云ふ區別はないのである。然し涅槃心を向上の一路と考へる時には、これを抽象的に考へて、却て曉り易いが如くに思ふ、然も抽象に墮して、惡平等に入り、其れを眞理だなどゝ思ふものは、比々皆然らざるはなしの有樣である。殊に個人的修養といふ樣な事に卽して、宗教や道德を考へるときは、一層此の弊害に陷つて、却て人倫の大義を忘れるような事があるのである、其の意味に於て差別智は明め難しである。既に本公案の解釋の內にも說いた如くに、人倫の大義は、普遍性と必然性とを既に形式的に具備して居る所の、主觀の形式的無限眞態の創出する內容であつて、其れが卽ち差別智である。更に換言すれば、一物一事、皆な涅槃心卽ち組織の上から見る時は、大切なる契機である、諸法實相である。而て諸法實相の現實の狀態は、

人倫的關係であつて、家族國家がそれである。故に差別智を明かにすることは、大光明によつて事々物々を照すことであつて、家も國も自ら安泰なるを得べき理である、無門慧開は其の四十八則の評唱及び頌に於て、特によく差別智を明にすることに留意して居ることは、讀者の自ら承當せられることと思ふ。慧開の力は特に玆にある。其多くのものが只だ悟りだとか、個人の解脫自由とかに留意して居る間に慧開が特に此れを留意した事は、卽ち余が又『無門關』の解釋した所以である。

× × ×

以上『無門關』を解釋し終る。時に大正六年七月九日。謹て香を燒き
菅公の神靈を請じ奉る。

13. 2. 15

大正七年一月十五日印刷
大正七年一月十八日第一刷發行
昭和十一年八月五日第十一刷發行

版權所有

無門關解釋
定價貳圓八拾錢

著者　紀平正美
發行者　東京市神田區一ツ橋二丁目三番地　岩波茂雄
印刷者　東京市神田區錦町三丁目十一番地　白井赫太郎
精興社印刷

發行所　東京市神田區一ツ橋二丁目三番地　岩波書店
電話（八）七番・八九番・八〇番・（二）一〇二番（小智部專用）
振替口座東京二六二四〇番

（大森製本）

禪箴

循規守矩、無繩自縛、縱橫無碍、外道魔軍、存心澄寂、默照邪禪、恣意忘緣、墮落深坑、惺惺不昧、帶鎖擔枷、思善思惡、地獄天堂、佛見法見、二銖圍山、念起卽覺、弄精魂漢、兀然習定、鬼家活計、進則迷理、退則乖宗、不進不退、有氣死人、且道、如何履踐、努力今生、須了却、莫敎永劫受餘殃、

紀平正美著

改訂 認識論

此書が認識論一般を根本的に說く著述として、學習者を啓發し我が學界に裨益した事は甚大である。第一編は認識に關する見解の歷史的考察をなし、第二編は認識を分析し、感性的、概念的、理性的諸認識の成立を論じ、第三編は眞理の意義を明かにし、認識の批判をなしてゐる。認識の大綱を知る事は眞理を愛する人々の第一の仕事であらう。

四六判四二四頁
定價壹圓八拾錢
送料書留廿一錢

改訂 哲學概論

哲學的諸問題を著者の全人格の力を以て廣く公平に概說せるもの。緒論「哲學の概念」は哲學の意味、宗教や藝術との關係などを說き、哲學の研究法に及び第一編「實有論」は歷史的概觀より唯物論、唯心論其他を解明し、第二編「認識論」は認識の意義、問題の本質を明かにし、第三編「行爲論」は行爲の概念より善、神、自由に說き及んでゐる。

菊判五九〇頁
定價參圓貳拾錢
送料書留卅三錢

紀平正美著

無門關解釋

無門關四十八則の論理的解釋、禪の論理的考察にして、著者は序言に「禪宗は鎌倉時代に前後して我邦の精神界へ入つて來たもので、武士が武士としての日本の精神を見出す一大機會になつた事は事實である。此の意味に於て禪を論理的に解釋する事は我國の思想を論理的に考察する上には大切なる一契機をなすもの」と、その深い意圖を如實に語つてゐる。

菊判四〇六頁
定價貳圓八拾錢
送料書留卅三錢

行の哲學

東洋、ギリシヤの哲學思想、カント、フィヒテ、ヘーゲル等ドイツ觀念論の思想に解釋を下し、之を止揚して著者自らの哲學を說くものにして、「行の哲學」とは人としての行爲の意義の闡明、人間文化の動力の研究であり從て藝術、宗教、科學、哲學又夫等に應じての社會組織の批判である。含蓄深く哲學概論、國民道德の序說として味讀すべき名著である。

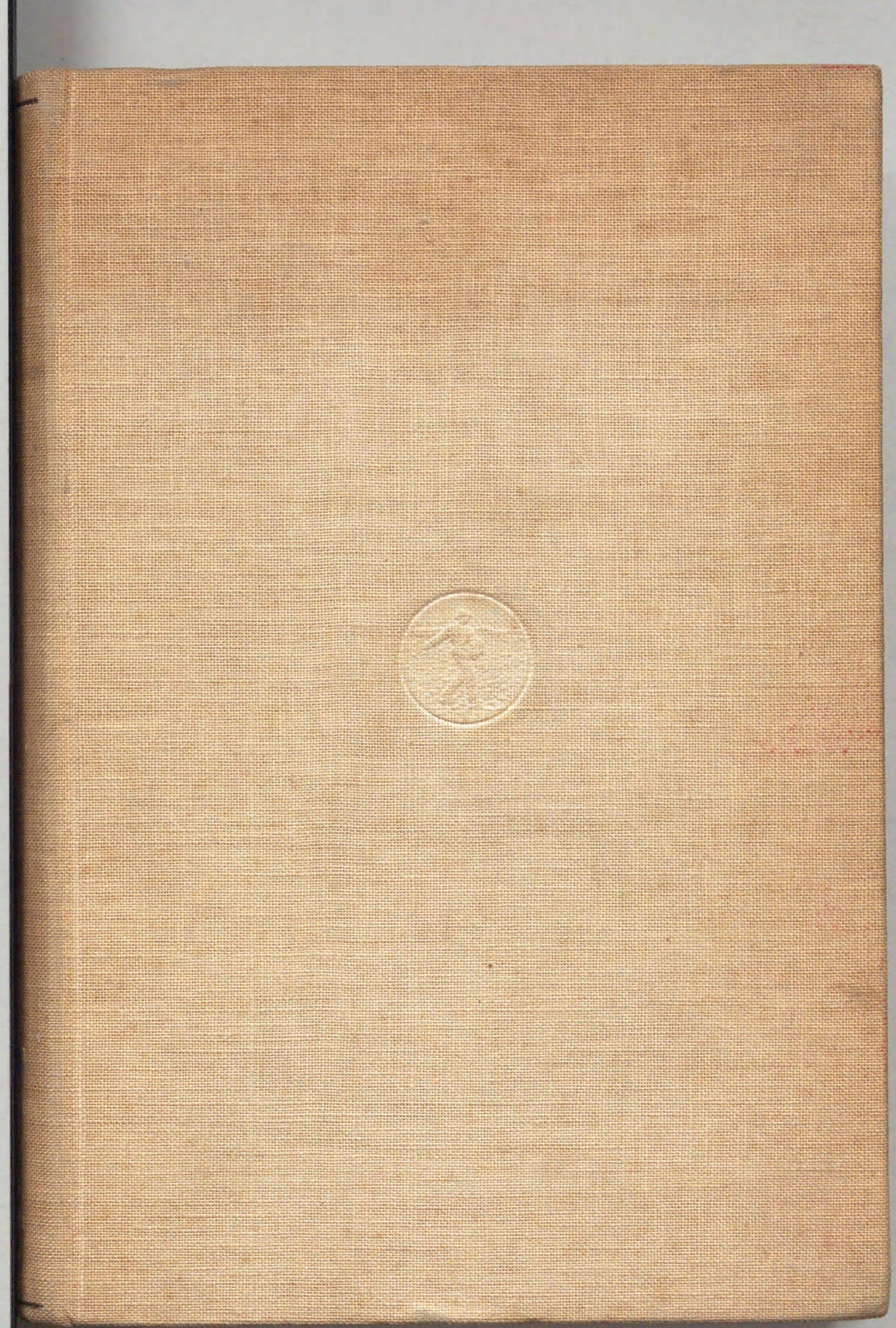
菊判四二二頁
定價貳圓參拾錢
送料書留卅三錢

日本精神

紀平正美著

菊判四三四頁
定價貳圓八拾錢
送料書留卅三錢

『行の哲學』の結末に「我は日本人なり」の句を掲げ、爾來更にその意義の開展に努められた博士近來の成果にして、日本精神を分析し、日本思想發展の跡を考へ、國家生活の意義をきはめ、仁義忠孝の論理的考察をなし、幾烈なる情熱と忠誠そのものの如き信念とを以て日本精神を闡明せるものである。力づよき日本精神の把握こそ現下の所謂思想困亂時代に際しての最緊要事。心あるものの必讀すべき好著である。

目次概要 序言 第一日本精神＝何にくそ・清明心・武士道的訓練・概念の確立・あかぬけ、第二日本思想概說＝序曲・自己意識活動の形式—古事記の卷・座—たかみくら・藝術の製產—大佛の卷・宗教的葛藤—三願轉入の卷・武士道の發達—(甲)つれづれの卷・—(乙)正義勝利の卷・國家としての統一・—(甲)丸くて四角、忠臣藏の卷・—(乙)敷島の大和心の卷・國威の發揚・終曲、第三我が國家生活を如何に考ふべきか＝所謂思想問題の哲學的考察・我が國體に就て、第四仁義忠孝＝總說・仁・義・忠・孝・結論

BOOKS
TOKYO
玉英堂書店
本郷店・神田店